

中古のマデ——第一種副助詞——

小柳智一

キーワード…極限、延長、到達、持続、極度

要旨

中古のマデの意味用法を上接語句に着目して整理し、さらにマデの語性を明らかにする。まず、マデの上接語（四種）と用法（五つ）との間には「[1]名詞→〈極限〉、[2]場所名詞→〈極限〉〈延長〉〈到達〉、[3]時詞→〈持続〉、[4]指示副詞→〈極度〉」という対応が見られる。マデの上接部が句である場合もこれに倣う。このような対応が見られるのは、マデの「要素間に序列のある集合から、或る要素を取り出し、その要素に至るまでの全要素を含めて示す」という意味と、マデの関係する集合の性質とに基づいたためである。次に、マデの語性は右の用法に対応して「極限→〈延長〉→〈持続〉→〈極度〉」という第一種副助詞内部の幅と、「極限→〈延長〉→〈到達〉」という第一種副助詞から格助詞に渉る幅との二重の幅を持つ。ここに「第一種副助詞」と言うのは上接語にだけ関係する副助詞のことで、対して、句全体に関係するものを「第二種副助詞」と呼ぶ。

はじめに

中古のマデは、例えば、時枝誠記『日本文法文語編』（一九五四、岩波書店）が「格を表す助詞」と「限定を表す助詞」の両方に掲出するように、語性の幅を持つ。これを一般に行われている言い方で言えば、マデは格助詞と副助詞とに渉る幅を持つということである。けれども、それが具体的にどのような幅であるかは明らかにされていない。また、マデの意味用法についても詳しい考察はなされていないようである。そもそもマデは古代から現代まで目立った変化をしていないこともあつてか、研究の主題となることがほとんどなかった。しかし、中古の副助詞を体系的に研究しようとする時には当然見過ごすことができない。本稿はそうした研究の一環としてマデを正面からとりあげる。そして、まずマデの意味用法を上接語句に着目して考察・整理し、その上でマデの語性の幅を明確にしようと思う。

資料には主に源氏物語（源氏物語大成）校異篇本文に依る、それ以外の資料を用いる際は岩波日本古典文学大系本に依る。

第一節 マデの用法

源氏物語には五三四例のマデが見られ、これらのマデの用法を整理すると、次の五つが認められる。

〈極限〉 或る事物を並列する諸事物の限度のものとして示す。

〈延長〉 或る地点を空間的な拡がりの限界点として示し、それに

よつて空間量を表す。

〈到達〉 或る地点を移動の終点・到達点として示す。

〈持続〉 或る時点を時間的な拡がりの限界点として示し、それに

よつて時間量を表す。

〈極度〉 或る事態を並列する諸事態の限度のものとして示し、そ

れによつて別の事態の程度が極度に高いことを表す。

以下、それぞれに該当する用例を挙げて見ていく。まず、〈極限〉の用例を挙げる。

1 山寺にはいみじき光行ひ出し奉れりと、仏の御面目ありと、

あやしの法師ばらまで喜びあへり。〈賢木、三五九②〉

この用例は、光源氏を迎えたことを御本尊の名誉として、山寺の高僧は言うまでもなく「あやしの法師ばら」まで喜びことを表している。マデは「あやしの法師ばら」を喜ぶ者の限度として示す。つまり、喜ぶ可能性のある者が、最も喜びそうな高僧から最も喜びそうもない「あやしの法師ばら」まで並列してあり、その中からマデは最も喜びそうもない者（即ち、喜ぶ限度の者）を取り出して示しているのである。それ以上のない限度の事物を示すので、このようなマデの用法を〈極限〉と呼ぶことにする。

次に、〈延長〉の用例とは次のようなものである。

2 朱雀より五条の大路を西ざまに折れ給ふ。桂川のもとまで、物見車隙なし。〈行幸、八八五⑧〉

このマデは「桂川のもと」という地点を空間的な拡がり（即ち、延長）の限界点として示し、用例は、その「桂川のもと」に至るまでの空間を物見車が隙なく満たすことを表している。「桂川のもとまで」は全体で空間量を表す副詞に相当すると思われる。

続いて、〈到達〉の用例を示す。

3 摂津国までは船にて、それよりあなたは馬にて、急ぎ行き着

きぬ。〈濤標、四九〇⑩〉

このマデは「摂津国」を移動の到達点として示し、用例はそままで船で移動することを表している。

次に、〈持続〉の用例とは次のようなものである。

4 御前に候ひて、今まで更かし侍りにける。〈賢木、三六二⑩〉

このマデは「今」という時点を時間的な拡がり（即ち、持続）の限界点として示し、用例はその「今」に至るまでの時間をずっと帝の前に伺候して過ごしたことを表している。「今まで」は全体で時間量を表す副詞に相当する。この〈持続〉は先掲の〈延長〉と、時間・空間の相違を持ちつつ対応し、平行的な関係にある。

最後に、〈極度〉に該当する用例を挙げる。

5 なまかたほなる事見え給はば、かうまでことごとしうもてな

し思さじ。〈行幸、九〇七⑩〉

これは、玉鬘に整わない所があるなら、光源氏はこんなに裳着の儀式を盛大に執り行うくらいまで熱心に世話をしたりするまい、と内大臣が推量する場面のものである。「（光源氏が玉鬘を）ことごとしうもてなし思」すことの現れ、「現れ」については第三節参照）には、

本邸に部屋を用意する、調度品を特別にあつらえる、などの様々な事態が並列してありうるが、マデはそうした諸事態の中で、「かう」の指す「裳着の儀式を盛大に執り行う」という事態が最も甚だしいもの(即ち、限度のものである)ことを示す。そして用例は、「裳着の儀式を盛大に執り行う」ことが現れる、くらい「ことごとくしうもてなし思」すというように、「かう」の指す或る事態(裳着の儀式を盛大に執り行う)によって別の事態(「ことごとくしうもてなし思」す)の程度が極度に高いことを表している。「かうまで」全体はいわば一語の程度副詞に相当すると見られる。

以上の五つが、マデの用法として認められるものである。

第二節 上接語句と用法の対応

用例を詳しく見ると、右の五つの用法とマデの上接語句との間に対応関係のあることが知られる。本節ではマデの上接部を語である場合と句である場合とに分け、用法との対応関係を示す。

二・一 上接部が語である場合

マデの上接部が語である用例は源氏物語に二六〇例あり、語の種類によっておおよそ四つに分類される。下接するマデの用法を合わせて示すと次のようになり、対応関係のあることがわかる。なお、場所を表す名詞は、普通の事物を表す名詞と異なる所があるので(第三節で後述)、「場所名詞」として特立する。

[1] 名詞

〈極限〉

[2] 場所名詞

〈極限〉 〈延長〉 〈到達〉

[3] 時詞

〈持続〉

[4] 指示副詞

〈極度〉

以下、用例を示し、それぞれの対応を見ていこう。

[1] 名詞 (五四例) 〈極限〉

6 おぼえ殊にかたちある限り、下襲の色、表の袴の紋、馬鞍^まで、みな整へたり。〈葵、二八五①〉

7 上下の僧ども、そのわたりの山^まで物たび、尊き事の限りを尽くし出で給ふ。〈賢木、三五九⑤〉

第一節の用例1はここに分類される。これらのマデは、上接名詞の表す事物を限度のものとして示す〈極限〉の用法である。

[2] 場所名詞 (四七例)

先に示したように、場所名詞に下接するマデの用法には〈極限〉〈延長〉〈到達〉の三つが見られるが、場所名詞の表す地点の性質と述語の性質とによっていずれかに決まる。

○ 〈極限〉 (八例)

8 故御方に、下人なれど、久しく仕うまつり馴れて、かの隠れ給へりし御住処までありし者なりけり。〈玉鬘、七三三④〉

9 高きも短きも、女といふものは、かかる筋にてこそ、この世後の世まで苦しき身になり侍なれ。〈東屋、一八二一③〉

場所名詞に下接するマデが〈極限〉を表すのは、場所名詞が存在地点を表し、述語が静止性(非移動性)の場合である。例えば、用例8は下人が普通の「御住処」は言うまでもなく、故御方の「隠れ給へりし御住処」においても仕えていたことを表している。「御住処」は下人の存在する地点で、「あり」は静止性の述語である。

○ 〈延長〉 (二〇例)

10 月いと明うさし入りて、はかなき旅の御座所、奥まで限なし。

〔須磨、四二八⑭〕

11道のほどの心もとなきに、げにかの院は、ほとりの大路まで人立ち騒ぎたり。〔若菜下、一一八三⑬〕

第一節の用例2はここに分類される。ここに分類される用例は場所名詞が到達地点を表し、述語が静止性の場合である。例えば、用例10は月光が家に射し込んで奥までずつと明るいことを表している。「奥」は月光の到達地点で、「限なし」は静止性の述語である。「到達」と「静止」は本来矛盾する概念だが、到達した結果としての空間・範囲内に事物が静止（存在）していると解することによって、矛盾は解消される。この時、到達地点に向かって移動するのは、本質的には言語主体の「視線」である。したがって、到達地点と静止性述語とによって表されるのは、言語主体の視線が移動・到達した空間・範囲内に事物が遍在しているということである。用例10の「奥」は確かに月光の到達地点であるが、それは視線の到達地点まで月光が遍在していることによる。このように考えると、到達する事物が明らかでない次のような例も、同様に理解できる。

12髪、桂に少し足らぬほどならむと見えて、未まで塵の糺ひな

く、つやつやとこちたうつつくしげなり。〔椎本、一五八〇⑫〕

この用例では、言語主体の視線が髪の「末」まで移動・到達し、そこに至るまでの全範囲（即ち、髪全部）が「塵の糺ひなく、つやつやとこちたうつつくしげなり」なのである。このように「延長」の到達地点は言語主体の視線のものと考えられる。

さて、これが実際に事物の移動・到達した結果としての到達地点になると、次の「到達」の用例になる。

○〔到達〕（二九例）

13ことと明くなれば、障子口まで送り給ふ。〔帝木、七二〇〕

14しか御耳とまるばかりの手などは、いづくよりかここまでは伝はり来む。〔橋姫、一五三六④〕

第一節の用例3はここに分類される。マデに上接する場所名詞は事物が実際に達する到達地点を表し、述語は移動性の述語になっている。語彙として移動性が顕著でない動詞でも、何らかの移動性の意を伴って述語になっていれば、この「到達」の用例になる。

15人一人を思ひかしづき給はん故は、ほとりまでも匂ふ例こそあれ。〔真木柱、九五三②〕

16瘦せ給へる事、いとほしげにさらばひて、肩のほどなどは、痛げなるまで、衣の上まで見ゆ。〔未摘花、二二〇⑭〕

以上の三つの用法について、上接する場所名詞の表す地点の性質と述語の性質とを整理すれば、次のようになる。

マデ	地点	述語
〔極限〕	存在 _地 点	静止性述語
〔延長〕	到達 _地 点	静止性述語
〔到達〕	到達 _地 点	移動 _性 述語

この表から、[2]場所名詞に下接するマデの三つの用法は連続的に推移することが見てとれる。

[3]時詞（八〇例）〔持続〕

17昨日まで高き親の家にあがめられかしづかれし人の女の、今日はなほなほしく下れる際の好き者どもに、名を立ち欺かれ
て、〔若菜上、一〇三六⑭〕

18 なほいかなるさまに世を恨みて、いつまでおはすべき人ぞ。

〈手習、二〇二三②〉(不定の時詞)

第一節の用例4はここに分類される。時詞に下接するマデは「(持統)の用法である。次のように、通常は時詞と見られない名詞でも時点を表すと解される場合は、時詞に準じて扱うことができる。

19 もし世の中思ふやうならば、ゆゆしき予言なれど、尼君そのほど、まで長らへ給はなん。〈若菜上、一一〇〇①〉

20 名残、までとまれる御匂ひ、「闇はあやなし」と独りごたる。〈若菜上、一〇六二⑫〉(「名残」は光源氏の立ち去った後の時点)

[4] 指示副詞(七〇例) 〈極度〉

21 もとよりいたう思ひつき給ふ事なくて、かくまでかしづかんとも申し立たざりしを、〈少女、六八六②〉

22 さまざま見せつらんを、かどかどしと思せど、人近ければ、くはしくも宣はず。〈浮舟、一九〇八⑬〉

第一節の用例5はここに分類される。用例5を挙げた際に述べたように、マデは指示副詞の指す或る事態によつて、別の事態の程度が極度に高いことを表す。例えば、用例21では「かく」は「内大臣が雲井雁を東宮妃にしようとする」ことを指し、これによつて「内大臣が雲井雁をかしづかん」ことの程度を表している。したがつて、指示副詞に下接するマデの用法は「極度」である。^{注2)}

ところで、少数ながら右の四種以外の上接語があるので補つておく。一つは、マデが格助詞トに下接する用例である(七例)。

23 「さぶらふ人々の中に、かの中納言の手に似たる手して書きたるか」とまで申し寄れど、〈若菜下、一一九七⑨〉(女三宮のもの

とにあつた手紙の筆跡を見て、光源氏が女三宮と柏木中納言と

の仲を疑い始める場面)

先掲の、マデの上接語が[1]名詞である用例を見ると、その名詞はほとんどが主格・対格などの格に立つ。右のマデの上接部も格として見れば、引用格とすることが可能である。これを重視すれば「[1]と」全体を[1]名詞と同等に扱うことができ、「く」ということまでと解して、マデを「極限」の用法と見なすことになる。

もう一つは、源氏物語には見られないが、マデの上接語が量副詞・数詞の用例である。次は量副詞「なから」の例である。

24 これが返し、今一度せんとて、なからまではあそばしたなるを、〈かげろふ日記・下、三三二⑥〉

「なから」は、歌一首を全体としてその半ばを意味する。返歌をその半ばまで「あそばしたなる」のだから、「なから」は一種の到達地点と見られ、マデは「到達」の用法である。[2]場所名詞の用例に準じて扱うことができるだろう。

マデの上接語が数詞である用例には、次の三種類が見られる。

(イ) 数詞が事物を表す場合

25 頭の中將の宿直所に、少し人々しき限り、六位まで集まりて、
〈枕草子・八二段、一一七②〉

(ロ) 数詞が事物の個数を表す場合

26 結縁の八講し給ふ。……げにぞ隙なかりける。轅の上にまた
さし重ねて、三つばかりまでは少し物も聞こゆべし。〈枕草子・

三五段、七七①〉

(ハ) 数詞が時間数を表す場合

27 婿取りして四五年まで産屋の騒ぎせぬ所も、いとすさまじ。
〈枕草子・二五段、六七⑬〉

まず(ハ)は、数詞「六位」が「六位の者」を表す名詞として用いられているので、先の[1]名詞の用例と同様に考えられ、マデは〈極限〉を表す。次に、(ロ)の「三つ(ばかり)」は車の個数を表す数詞だが、単にその数を表すのではなく、或る地点までの距離を車の大きさ・長さ(即ち、空間量)によって「三つ(ばかり)」と量り、そこを到達地点として示している。つまり、[2]場所名詞のように用いられており、その地点に至る範囲は「少し物も聞こゆべし」なので、マデは〈延長〉の用法である。最後の(ハ)の場合は、「四五年」が「婿取りし」た時点から後四五年経った時点を表し、マデは〈持続〉の用法である。よって、[3]時詞の場合に倣って考えられる。このように、量副詞・数詞が上接語である用例は、先の[1]名詞・[2]場所名詞・[3]時詞に準じて捉えることができる。

以上、最後に補った周辺のな用例も含めて、マデの上接語と用法との間には対応関係が見られるのである。

二・二 上接部が句である場合

次に、上接部が句である場合を見ることにする。マデの上接部が句である用例は、源氏物語に二七四例ある。マデは〈極限〉〈持続〉も表すが、圧倒的に〈極度〉を表す用例が多い。そして、以下に示すように、マデの上接部が句である場合は、右に見た上接部が語である場合と同様に捉えることができる。

○〈極限〉(二例)

28 御心とまりけり。いとど近くて見えむまでは思し寄らず。〈葉、

二八九⑦〉朝顔の姫君は光源氏に心を寄せるが、今以上うちとけて

逢うことまでは思わないという場面)

この用例のマデの上接句は「こと」という準体句であり、格付格に立っている。よって、本節一で見た[1]名詞の用例に準じて考えられるだろう。類例は少ないが、他の資料にもある。

29 女房の従者、その里より来る者、長女、御廁人の従者、たびしかはらといふまで、いつかはそれを恥ぢ隠れたりし。〈枕草

子・二四段、六四③「よもの」という準体句)

○〈持続〉(三八例)

30 みづからの夢にはあらず、人の御事を語るなり。この夢合ふ

まで、また人にまねぶな。〈若紫、一七六①〉

31 今とは見えしまで、いとあはれと思ひて、後ろめたげに宣ひ

しを。〈橋姫、一五〇八⑫〉

これらのマデの上接句は「くとき」という意の準体句の一種と見てよいだろう。次のような、時を表す名詞(時詞に準ずる)が連体句を伴ったものに等しい。

32 その初めより、やがて果つる日まで、立てたる車のありける

に、人寄り来とも見えず、〈枕草子・三五段、八〇⑬〉

したがって、〈持続〉のマデの上接句は、[3]時詞と同様に扱うことができる。

○〈極度〉(二三四例)

33 式部卿の宮も、御孫を思して、御鼻の色づくまでしほたれ給

ふ。〈若菜下、一一一七⑧〉

34 それとも見分かれぬまで降り落つる御涙の、水茎に流れ添ふ

を、〈幻、一四二一⑦〉

35 かくいとあやしきまで人の咎むる香にしみ給へるを、〈匂宮、

一四三六⑤〉

これらのマデの上接句(付属句)は事態を表し、その事態は、「付属句+マデ」の連用修飾する句(主句)が表す別の事態の現れと解することができる。例えば、用例33の「(式部卿の宮の)御鼻の色づく」は、「(式部卿の宮が)しほたれ給ふ」の現れと解される。そして、「御鼻の色づく」事態が現れるほど甚だしく「しほたれ給ふ」というように、付属句の事態によって主句の事態の程度が表されるので、マデは「極度」の用法である。本節一で[4]指示副詞に下接するマデが「極度」を表すことを見たが、その時、指示副詞は事態を指すのであった。「極度」のマデの上接部は、右のように句の形で明確に示すか、語である指示副詞によって指すかの違いはあるが、ともに事態を表す点で共通している。よって、マデが句に下接して「極度」を表す右の用例は、マデが[4]指示副詞に下接する場合と同列に扱うことができるだろう。なお、「うとましまで」に「隠しける」(手習、二〇四五⑤)のように二を伴うこともあるが、二の有無は意味に関係しない。「指示副詞+マデ」全体が一語の程度副詞相当と見られたように、「付属句+マデ」全体も程度副詞相当と考えられるので、この二は副詞語尾だろう。

ところで、いささか特殊な用例が一例ある。それは、「くぬまでも」の形で逆接仮定を表すと見られる、次の用例である。

36用みさせ給はぬまでも、このいましめの日を過ぎず、この由を告げ申し侍らん。(明石、四四七⑦)

他の資料にも、稀ではあるが類例がある。

37月を見て荒れたる宿にながむとは、見に來ぬまでも、誰に告げよと。(和泉式部日記、四二二②)

これらの用例は、たとえ想定した或る事態の実現が困難でも、そ

れより蓋然性の高い(実現容易な)事態なら実現するだろう、という意を表している。例えば、用例36は明石入道が自分の見た夢兆を光源氏に伝えようとする場面のもので、たとえ光源氏が「用みさせ給うことがなくても、話を聞くくらいのことならしてくれようから、「この由を告げ申し侍らん」というものである。「くぬまでも」がこのような意を表すのは、マデの提示する限度の事態を又が無いこととして示す一方、モがそれ以外(以下)の事態の在ることを暗示するためであろう。この「くぬまでも」のマデは、或る事態を限度のものとして示す点で「極限」「極度」のマデに近接しており、特殊とは言っても、マデの他の用例と断絶しているわけではない。

以上のように、マデの上接部が句である場合は、原則的に、マデの上接部が語である場合に倣って扱うことができる。以下では議論を簡単にするために、上接部が語である場合を中心に考察する。

第三節 対応の見られる理由——マデの意味——

それでは、マデの上接語と用法との間に右のような対応が見られるのは何故だろうか。これには、マデの意味が関わっていると考えられる。先の五つの用法に共通するマデの意味は、

要素間に序列のある集合から、或る要素を取り出し、その要素に至るまでの全要素を含めて示す。

というものだろう。「要素間に序列のある集合」とは、例えば、自然数が一、二、三……と並び、事物・事態が価値・程度の低いものからより高いものへ昇級するというように、或る基準によって集められた個々の要素が、一定の順序で配列される性質(即ち、序列性)を持つ集合のことである。この時、序列は蓋然性の高い(実現容易な)

要素ほど下位にあり、蓋然性の低い（表現困難な）要素ほど上位にある。マデの意味をこのように想定すると、先述の対応の見られる理由は以下のように説明することができる。

まず、[1]名詞は基本的に事物を表す。したがって、[1]名詞に下接するマデは、事物を要素として序列性のある集合に関係する。事物は一つ一つの輪郭・境界が明確なので、この集合は要素間（或る事物と別の事物）の連続性が弱いと考えられる。このような集合から或る要素を取り出すと、その要素は他と明確に区別された特定の個として際立って把握されるであろう。そして、その要素は際立ちつつも、マデの意味に基づいて、それより序列の下位にある全要素を含むことになる。その結果、取り出された要素はそれ以上の限度のものとして示されるのである。つまり、マデの取り出した事物を含めてそれ以下が問題なのであり、取り出された事物は常にそれ以上のない限度のものとなる。これが「極限」の用法である。

次に、[2]場所名詞は言うまでもなく場所を表すが、場所の集合には二通りの把握が可能である。一つは、個々の特定の場所の集合として要素間（或る場所と別の場所）の連続性が弱いとする把握であり、もう一つは、同一線上に稠密に並ぶ諸地点の集合として要素間（或る地点と隣接する別の地点）の連続性が強いとする把握である。換言すれば、前者は独立に存在する個々の地点の集合であり、後者は一方向に地続きの全地点の集合である。そして、前者のように把握すれば、集合から取り出された場所は他と明確に区別された特定の存在地点として際立ち、マデの用法は「極限」となる。一方、後者のように把握すると、取り出された場所は到達地点（限界点）となり、そこに至るまでの全地点を含み、全体として空間的な拡がり・空間量

を持つ。これが「延長」のマデの場合である。さらに、その到達地点に至るまでの過程が潜在化して到達地点だけが卓越すると、空間量性も潜在化し、マデは「到達」を表すようになる。「到達」のマデが空間量性を消失したわけではないのは、「摂津国まで行く」と「摂津国に行く」を比較すれば明らかであろう。

続いて、[3]時詞は時点を表す。時点は時間軸上に稠密に並ぶと考えられるので、その集合は要素間（或る時点と隣接する別の時点）の連続性が強い集合として把握される。したがって、マデに取り出された時点（限界点）は、それに至るまでの全時点を含んで全体として時間的な拡がり・時間量を持ち、マデは「持続」の用法となる。

ここで[2]場所名詞に戻ると、[2]場所名詞の表す場所は要するに、[1]名詞の表す事物と同様の性質（他と区別された特定の個としての性質）と、[3]時詞の表す時点と平行的な性質（同一線上に稠密に並ぶ他と連続した点としての性質）とを合わせ持つのである。マデが「極限」を表すのは前者に、「延長」「到達」を表すのは後者に基づく。これが、[2]場所名詞に下接するマデだけが複数の用法と対応する理由であり、本稿が[2]場所名詞を特立した所以である。

最後に、[4]指示副詞に下接するマデが「極度」を表すことについて考える。第二節で述べたように[2]指示副詞は事態を指し、事態を表す点で句に等しいので、考察の便宜上、マデが句に下接して「極度」を表す場合から見ることにする。前掲の用例33「御鼻の色づくまでしほたれ給ふ」は「御鼻の色づく」ことが現れるほど「しほたれ給ふ」というように、マデを伴う付属句の事態によって主句の事態の程度が表され、かつ前者の事態は後者の事態の現れと解することのできた。今、別の事態の現れである事態を「標家（事態）」、その

事態の元となる事態を「本体(事態)」と呼べば、標象事態によって本体事態の程度が表されると言うことができる(本稿の考察の範囲では、「標象―本体」の関係を「結果―原因」という広義の因果関係に読み替えてもよい)。ところで、連用修飾の有属文(山田文法による)には、次のような類のものがある。^{注5)}

38 刈り孤の思ひ乱れて我が恋ふと、妹知るらめや。人告げずして。^{古今集、11・四八五}

この用例の主句の事態「我が恋ふ」は、付属句の事態「思ひ乱れる」を標象とする本体である(「我が恋ふ」が原因となってその結果「思ひ乱れる」)。そして、「思ひ乱れる」の様子で、「我が恋」い、「思ひ乱れる」ほど、「我が恋ふ」というように、「思ひ乱れる」は「我が恋ふ」の情態と程度を未分化な形で表している。このことから、右のような有属文には、付属句の標象事態によって主句の本体事態の程度が表されるという意味関係が潜勢している、と考えることができる。マデはこのような有属文の意味関係に関与することによって、潜在する程度の意味を顕勢化させるのである(試みに、用例38を「思ひ乱るるまで我が恋ふ」とすれば、^{極度}のマデの用例となる)。その際、表される程度が極度に高いのは、マデが付属句の表す標象事態を、ありうる標象事態の中でそれ以上のない限度のものとして示すからである。したがって、^{極度}のマデの基本構文は、次のような有属文として把握することができる。

* 付属句(標象) + マデ ― 主句(本体) ^{有属文}

そして、同様のことは、[4]指示副詞の場合にも当てはまる。指示副詞は先述のように事態を指すので、「指示副詞 + マデ」が「付属句 + マデ」と価値を等しくするからである。次のような例を見れば明ら

かなように、指示副詞も情態と程度を未分化な形で示す。

39 これはいかなれば、かく結ばほれたるにか。^{胡蝶、七八九} (玉鬘宛ての「いと細く小さく結びたる」恋文(実は髭黒大将からのもの)を見た、源氏の言葉)

以上、マデの上接語と用法との間に対応が見られるのは、マデの意味と、マデの関係する集合の性質とに基づくためだと考えられる。

第四節 マデの語性の幅

さて次に、マデの語性について考えてみたい。マデは右に見てきた五つの用法に対応して語性の幅を持つ。まず、^{極限}のマデの語性について考えるが、この時、次のような例が参考になる。

40 僧俗、上達部、殿上人、地下、六位、何くれまでもて続きたる、いみじう尊し。^{枕草子・二七八段、二九九}

この例では、「僧俗」以下と並立する「何くれ」にマデが下接しているのではなく、「何くれまで」全体が「僧俗」以下と並立している。つまり、「僧俗、……、何くれ」までではなく「僧俗、……、何くれまで」という構文である。このマデは上接名詞「何くれ」に密着し、全体で「僧俗」以下と並立する一語の名詞に相当すると見られるので、一往、接尾語的なもの、詳しく言えば名詞性の接尾語的なものと言うことができるだろう。

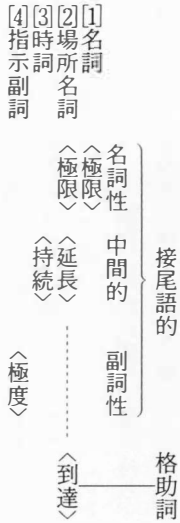
次に、^{極度}のマデは第一節で用例5を挙げた際に述べたように、上接する指示副詞とともに全体で(用例5では「かうまで」の形で)一語の程度副詞に相当する。マデは副詞を構成し、その一部になるの

で、副詞性の接尾語に近いと見なされる。続いて、^{延長}・^{持続}のマデも第一節の用例24で見たように、

上接する場所名詞・時詞とともに全体で(用例2では「桂川のもとまで」、用例4では「今まで」の形で)、空間量・時間量を表す一語の副詞に相当すると考えられる。このマデは副詞を構成する点で〈極度〉のマデに近いが、その一方で、上接語の表す地点・時点を特定の明示するので、事物を特定の明示する〈極限〉のマデに類似している。これは、〈延長〉〈持続〉のマデが限界点を示すことによつて、「そこに至るまでの全量」というように間接的に空間量・時間量を表すためである(この点で、直接的に空間量・時間量そのものを表す副詞乃至数詞「一町・一時」や副詞乃至形容詞「遠く・久しく」などは異なる)。こうしたことから、〈延長〉〈持続〉のマデは、名詞性の〈極限〉と副詞性の〈極度〉との中間に位置づけたいと思う。

最後に、〈到達〉のマデは、場所名詞の表す場所を終点・到達点として、移動の動作に関係づける。例えば、先掲の用例3のマデは「撰津国」を「急ぎ行き」と動作・状態との論理的・事態構成的な関係を示すのは格助詞の働きである。よつて、このマデはニ・ヘ・ヨリなどと並ぶ場所方向の格助詞の一種と見なされる。広義の場所格(これはニが表す)の分化した格の一つとして「到達格」を設定すれば、〈到達〉のマデは到達格を表す格助詞ということになる。

以上のことを図示すると、次のようになる。



この図から、マデの語性が二重の幅を持つことがわかる。一つは、〈極限〉の名詞性から〈延長〉〈持続〉の中間的なものを経て〈極度〉の副詞性へ連続する幅で、これは接尾語的なものの内部での幅である。もう一つは、[2]場所名詞に下接するマデが〈極限〉の名詞性から中間的な〈延長〉を経て〈到達〉の格助詞へ連続する幅で、これは接尾語的なものから格助詞へ渉る幅である。

このうち、後者は、第二節一で整理したように、[2]場所名詞の表す地点の性質と述語の性質とによつて推移するので、接尾語的なものと格助詞とに渉るけれども、幅の内部の連続性は強い。

一方、前者は中間的なものを介しているとはいえず、両極の名詞性と副詞性との隔たりがあまりに大きいと思われるかもしれない。しかし、実際にはそれほどでもない。例えば次のような例がある。

41入道、今日の御まうけ、いといかめしう仕うまつれり。人々、下の品まで、旅の装束めづらしきさまなり。〔明石、四七二⑩〕

この用例のマデは[1]名詞に下接しているので〈極限〉を表し、名詞性の接尾語的なものと見られる。しかし、同時に別の見方もできる。即ち、「下の品まで」は「人々」と並んでともに主格に立ち、かつ「下の品」は「人々」に包摂される関係にあるために、「下の品まで」の有無は文全体の意味に積極的に関わらず、包摂される「人々」の分析的な繰返しにすぎないとも見られるのである。このように見ると、「下の品まで」は格関係から遊離し、全体で「人々」の量を表す量副詞(例えば「みな」に近づく)。この量副詞が、〈延長〉〈持続〉のマデの構成する空間量・時間量を表す副詞や、さらには〈極度〉のマデの構成する程度副詞に連なるものであることは言うまでもない。つまり、右のマデは量副詞を構成する副詞性の接尾語に近いと

見ることのできるものである。このように、名詞性のマデは副詞性へ転換しうるので、両者の隔たりは見かけほど大きくない。やはり幅の内部の連続性は強いのである。

以上のように、マデの語性は用法に応じて幅を持ち、その幅は二重の幅であるが、幅内部の連続性は強く緊密である。

第五節 第一副助詞

ところで、右のようにマデの語性を「接尾語的なもの・接尾語に近いもの」^{注6}と捉えるだけでは、結局、マデを曖昧なものとして放置することになる。そこで、典型的な接尾語と比較することによって、さらにマデの語性を探っていくことにしたい。

まず、典型的な名詞性の接尾語には、例えば「老人ども^二三人ぞ候ふ」(総角、一六五四③)のドモがある。これと〈極限〉のマデ(名詞性の接尾語的)とを比較すると、上接名詞とともに全体で一語の名詞相当になる点で共通し隣接するが、意味上は明らかに異なっている。ドモは上接名詞の表す事物の複数性を表すのに対し、マデは上接名詞の表す事物が集合内でのように在るかという集合内での位置を表す。言い換えると、ドモが当該事物それだけのことを表すのに対し、マデは当該事物と他の事物との関係を表すのである。それ故、マデは当該事物と他の事物との関係を見るための基準を必要とし、それは述語によって表される。例えば、先掲の用例「あやしの法師ばら^{まで}喜びあへり」のマデは、述語「喜びあへり」を基準として構成される「喜び可能性のある者の集合」内で、「あやしの法師ばら」がどのような位置にあるか(他の者とのような関係にあるか)を表している。つまり、マデは意味上述語を志向し、その述語を

基準とする集合を前提とするのである。この点で、ドモのような名詞性の接尾語と大きく異なっている。

次に、副詞性の接尾語について見るが、ここで言う「副詞性の接尾語」とは広く、それが下接することによって副詞を構成するものの総称である(よって、詳しく見れば、次に挙げるものは形容動詞語幹を構成する接尾語、形式副詞^{注7}などと細分できるだろうが、問題にしない。また、構成される副詞の種類も今は問わない)。そのようなものとして「かうやうにおどろかし聞こゆる類ひ多かめれど」(賢木、三六四⑤)のヤウ(二)、「うち見るごとに涙のとめがたき心地するを」(手習、二〇三八⑨)のゴト(二)などを挙げる事ができる。これらと〈極限〉のマデ(副詞性の接尾語に近い)とを比べると、両者の間には全く差がない。つまり、〈極限〉のマデは副詞性の接尾語そのものなのである。しかし、他の副詞性の接尾語はマデの持つような広い語性の幅を持たず、マデ自体を副詞性の接尾語とすることはできない。飽くまでも、マデの一部である〈極限〉のマデが副詞性の接尾語に重なり連続するということである。

このように、マデは名詞性の接尾語に隣接し、副詞性の接尾語に連続するが、それらとは明らかに異なつた性質を持つ。つまり、両接尾語に連なりつつ、その間に独自の領域を占めるのである。このようなマデの語性はどのように捉えるのが適当だろうか。

先に、第三節でマデの意味を「要素間に序列のある集合から、或る要素を取り出し、その要素に至るまでの全要素を含めて示す」と想定したように、マデの意味は、当該事物・当該事態などを要素として含む集合全体を前提として成り立っている。また、副詞性の〈極度〉のマデは言うまでもなく、名詞性の〈極限〉のマデも先述のよ

うに意味上述語を志向する。こうした特徴はバカリやノミなどにも共通するもので、結論としてマデは従来通り「副助詞」と考えるのがよいと思われる。ただし、従来「副助詞」として一括されてきた語類は、実は少なくとも二種類に分かれる^{注10}。一つは構文上、上接語にだけ関係するもので、もう一つは構文上、句全体に関係するものである。例えば「直衣ばかりを取りて」（紅葉賀、二五八④）のバカリは前者で、格の内側に収まることから窺える通り「直衣」という上接語にだけ関係する。意味上も「取る」のが「直衣」だけだという意であり、バカリは「直衣」を限定する。これに対して「音をのみ泣き給ひて」（葵、二九四③）のノミは後者で、格の外側にありかつ同語反復的な「音を泣き給ひて」の「音」にだけ関係するとは認めがたいことから、「音を泣き給ひて」という句全体に関係すると考えられる。意味上も「音を泣き給」うという唯一種類だけの事態があることを表し、「泣き給」うのが「音」だけだということではない。前者のバカリのようなものを「第一種副助詞」、後者のノミ（他にダニ・スラなど）のようなものを「第二種副助詞」と呼ぶことにすると、マデは既に見た通り接尾語のように上接語に密着するので、バカリと同じく第一種副助詞ということになる^{注10}。

以上のことから、右に用いてきた「接尾語的なもの・接尾語に近いもの」は「第一種副助詞」と改められる。マデは格助詞に涉る語性の幅を持つが、本質的には第一種副助詞である。

おわりに

本稿の考察の結果をまとめると、以下のようになる。

- 1 マデの用法には〈極限〉〈延長〉〈到達〉〈持続〉〈極度〉の五

つが認められ、上接語との間に次のような対応が見られる。

- [1] 名詞 〈極限〉
- [2] 場所名詞 〈極限〉〈延長〉〈到達〉
- [3] 時詞 〈持続〉
- [4] 指示副詞 〈極度〉

また、マデが句に下接する場合も右に做つて扱うことができ（多くは〈極度〉を表す）。

2 右のような対応が見られるのは、マデの「要素間に序列のある集合から、或る要素を取り出し、その要素に至るまでの全要素を含めて示す」という意味と、マデの関係する集合の性質とに基づくためである。

3 マデの語性は、右の用法に依じて「極限」【名詞性】〈延長〉〈持続〉【中間的】〈極度〉【副詞性】という第一種副助詞内部での幅と、「極限」〈延長〉〈到達〉【格助詞】という第一種副助詞から格助詞に涉る幅との、二重の幅を持つ。

既に述べたように、バカリもまた第一種副助詞であり、バカリと対比することによって、マデの特徴は一層明らかになると思われる。また、しばしば言われるように、マデにはヨリと対になる側面があり、ヨリとの関係も改めて問題にしなければならない。が、こうしたことは総て別の機会に譲る。

注1 比較的詳しいものに次の研究がある。

松村明「副助詞——のみ・ばかり・まで・など・だに・すら・さへ・ばし——」（『国文学解釈と鑑賞』23-4、一九五八）

注2 他に、マデが「ほど」に下接して〈極度〉を表すと考えられる用

例が二例ある。ただし、それらは「ほど」に係る連体句内に指示副詞があり、また「ほど」が形式名詞であることから、[4]指示副詞に下接するマデ(用例21②)と、第二節二で見える句に下接して「極度」を表すマデ(用例33③35)とを撃くものだと考えられる。

か、やうに気近きほどまでは思し寄らざりしものを、へ一六四〇

⑨

かく待たれ奉るほどまで参り来ざりけること。へ一六五四⑦

注3 上接部が句でかつ「延長」へ到達を表すマデの確例は、管見に入る限りない。これは、準体句などの句が場所を表すことがほとんどないためかもしれない。また、源氏物語以外の資料には「よに至るまで」という例があるが、これは全体で「極限」のマデに相当する固的な形であり、マデの上接部が句である例に該当しない。

知りと知りたる人、法師に至るまで、「……」とおこせ言ふを聞くにも、へかけろふ日記、一八八⑩

注4 富士谷成章「あゆひ抄」(安永七へ一七七八)年刊はマデについて「其所まで行いたる心をいふ也」(巻三、一〇ウ)「級をへて其ほどにいたる心也」(同、一一オ)と述べる。特に後者に示唆を得た。

注5 「あゆひ抄」(巻五、四オ)は「火をちらして戦ふ・腹をよりて笑ふ」などの有属文に關与するテを「しるしので」と呼んで、「ししばらく神を隠してしるしのあらはなる物をいふ也」と説き、「ほどに・よと云ほどに」という程度の意を含む里言を当てる。本稿の「標象・本体」は「あゆひ抄」の「しるし・神」を参考にした(ただし、全同ではない)。また、川端善明氏の副詞論に多くを学ぶ。

川端善明「副詞の条件——叙法の副詞組織から——」(渡辺実編「副用語の研究」一九八三、明治書院)など

注6 第二節二で見たようにマデは句にも下接するので、句に下接するマデを「接尾語的・接尾語に近い」と言つてよいかが問題になるかもしれない。しかし、例えば、接尾語としか見られていないドモは「大将、うちまさりてをかしきども集めて」(蜻蛉、一九七二⑬)の

ように、準体句に下接することがある。また、いわゆるク語法のクのような特殊なもの一般には接尾語として扱われる。このように「接尾語」は雑多なものを含み、その中には句に下接するものもある。句に下接するマデを含めて「接尾語的・接尾語に近い」と言うことは許されると思われる。「接尾語・助詞」を厳密にどのよう定義するかは難しい問題だが、今は通念に従う。

注7 森重敏「日本文法通論」(一九七〇、風間書房)二八一—二八三頁)

注8 以下の内容は、次の拙稿で述べたことである。

「中古の「バカリ」と「ノミ」」(『國學院雑誌』98-12、一九九七)

「中古の「ノミ」について——存在單質性の副助詞——」(『國學院雑誌』99-7、一九九八)

注9 「万葉集のノミ——史的変容——」(『實踐國文學』55、一九九九)

注10 「極度」のマデが否定と照応する用例「かうまでことこしうもてなし思さじ」などの場合、マデが句に關係しているように見えるかもしれないが、直接句に關係しているのは「かうまで」である。

マデは「かうまで」の内において間接的に句に關係するにすぎない。よって、やはり第二種ではなく第一種である。

〔付記〕本稿は、国語学会平成十年度春季大会における口頭発表の一部に基づくものである。発表の席上およびその後の機会に多くの方から御教示を賜った。また、編集委員会の方からも貴重な御指摘を頂いた。記して感謝申し上げる。

——國學院大学非常勤講師——

(平成十一年七月一日 第一稿受理)

(平成十一年九月二日 最終稿受理)